

金將軍

芥川龍之介

青空文庫

ある夏の日、笠をかぶった僧が二人、朝鮮平安南道竜

ゆうこうぐんとうぐうり

岡郡桐隅里の田舎道を歩いていた。この二人はただの雲

んすい

水ではない。実ははるばる日本から朝鮮の国を探りに来た加

ひごのかみきよまさ

藤肥後守清正と小西撰津守行長とである。

こにしせつつのかみゆきな

二人はあたりを眺めながら、青田の間を歩いて行つた。すると

たちまち道ばたに農夫の子らしい童児が一人、円い石を枕にした

まま、すやすや寝ているのを発見した。加藤清正は笠の下から、

じつとその童児へ目を落した。

「この小こせがれ倅いそは異相いそうをしている。」

鬼上おにじようかん官にこんは二言と云わずに枕の石を蹴けはずした。が、不思議

にもその童児は頭を土へ落すどころか、石のあつた空間を枕にし
たなり、不相あいかわらず變静かに寝入っている！

「いよいよこの小こせがれ倅は唯者ではない。」

清正は香染こうぞめの法衣ころもに隠した戒刀かいとうのつかへ手をかけた。倭国わこくの
禍わざわいになるものは芽生めばえのうちに除のぞこうと思つたのである。しかし
行長は嘲あざわら笑いながら、清正の手を押しとどめた。

「この小倅に何が出来るもんか？ 無益むやくの殺せつしよう生せいをするもので
はない。」

二人の僧はもう一度青田あいだの間を歩き出した。が、虎鬚とらひげの生え
た鬼上官だけはまだ何か不安そうに時々その童児をふり返つてい
た。……

三十年の後のち、その時の二人の僧、——加藤清正と小西行長とは八兆八億の兵と共に朝鮮八道へ襲しゅうらい来した。家を焼かれた八道の民は親は子を失い、夫は妻を奪われ、右往左往うおうさおうに逃げ惑まどつた。けいじよう

京城けいじようはすでに陥つた。平壤へいじようも今は王土ではない。宣祖せんそお

王うはやつと義州ぎしゆうへ走り、大明だいまんの援軍を待ちわびている。もしこのまま手をつかねて倭軍わぐんの蹂躪じゅうりんに任せていたとすれば、美しい八道の山川さんせんも見る見る一望の焼野の原と変化するほかはなかつたであろう。けれども天は幸にもまだ朝鮮を見捨てなかつた。と云うのは昔青田の畔くろに奇蹟きせきを現した一人の童児、——金きん

応瑞うづいに国を救わせたからである。

金応瑞は義州ぎしゆうの統軍亭とうぐんていへ駈かけつけ、憔悴しやうすいした宣祖王せんそおう

の竜顔りゆうがんを拝した。

「わたくしのこうして居りますからは、どうかお心をお休めなさりとうございまする。」

宣祖王は悲しそうに微笑した。

「倭将わしやうは鬼神きじんよりも強いと云うことじゃ。もしそちに打てるものなら、まず倭将の首を断たつてくれい。」

倭将の一人——小西行長はずっと平壤へいじやうの大同館だいどうかんに妓生ぎせい桂けい月香いげつこうを寵愛ちやうあいしていた。桂月香は八千の妓生のうちにも並ぶもののない麗人である。が、国を憂うる心は髪に挿さした玫瑰まいかいの花と共に、一日も忘れたと云うことはない。その明眸めいぼうは笑っている時さえ、いつも長い睫毛まつげのかけにも悲しい光りをやどして

いる。

ある冬の夜、行長は桂月香に酌しやくをさせながら、彼女の兄と酒盛りをしていた。彼女の兄もまた色の白い、風采ふうさいの立派りっぱな男である。桂月香はふだんよりも一層媚こびを含みながら、絶えず行長に酒を勧めた。そのまた酒の中にはいつの間まにか、ちゃんと眠り薬が仕こんであつた。

しばらくの後のち、桂月香と彼女の兄とは酔い伏した行長を後あとにし、たまたま、そつとどこかへ姿を隠した。行長は翠すいきん金の帳ちようの外に秘蔵ほうけんの宝剣をかけたなり、前後も知らずに眠っていた。もつともこれは必ずしも行長の油断したせいばかりではない。この帳はまた鈴陣れいじんである。誰でも帳中に入ろうとすれば、帳をめぐつた宝ほ

うれい
鈴はたちまちけたたましい響と共に、行長の眠を破つてしまふ。ただ行長は桂月香のこの宝鈴も鳴らないように、いつのまにか鈴すずの穴へ綿をつめたのを知らなかつたのである。

桂月香と彼女の兄とはもう一度そこへ歸つて来た。彼女は今夜は緋ぬいのある裳もすそに竈かまどの灰を包んでいた。彼女の兄も、——いや彼女の兄ではない。王命おうめいを奉じた金応瑞は高たか々ただかと袖そでをからげた手に、青竜刀せいりゆうとうを一ふり提さげていた。彼等は静かに行長のいる翠金の帳へ近づこうとした。すると行長の宝剣はおのずから鞘さやを離れるが早いか、ちようど翼つばさの生えたように金將軍きんしょうぐんの方へ飛びかかつて来た。しかし金將軍は少しも騒さわがず、咄嗟とつさにその宝剣を目がけて一口の唾つばを吐きかけた。宝剣は唾にまみれると同時に、

たちまち神通力じんつうりきを失つたのか、ばたりと床ゆかの上へ落ちてしまつた。

金応瑞きんおうずいは大いに吼たけりながら、青竜刀の一払いに行長の首を打ち落した。が、この恐しい倭将わしようの首は口惜くやしそうに牙きばを噛かみ噛み噛み、もとの体へ舞い戻ろうとした。この不思議を見た桂月香けいげつこうは裳もすその中へ手をやるや否や、行長の首の斬きり口へ幾いくつ掴つかみも灰を投げつけた。首は何度飛び上つても、灰だらけになつた斬り口へはどうとう一度も据すわらなかつた。

けれども首のない行長の体は手さぐりに宝剣を拾つたと思うと、金將軍へそれを投げ打ちにした。不意ふいを打たれた金將軍は桂月香を小腋こわきに抱えたまま、高い梁はりの上へ躍り上つた。が、行長の投げ

つけた劍は宙に飛んだ金將軍の足の小指を斬り落した。

その夜も明けないうちである。王命を果した金將軍は桂月香を背負いながら、人氣のない野原を走っていた。野原の涯には残月が一痕、ちようど暗い丘のかげに沈もうとしているところだった。金將軍はふと桂月香の妊娠していることを思い出した。倭将の子は毒蛇も同じことである。今のうちに殺さなければ、どう云う大害を醸すかも知れない。こう考えた金將軍は三十年前の清正のように、桂月香親子を殺すよりほかに仕かたはないと覚悟した。

英雄は古来センチメンタリズムを脚下に蹂躪する怪物である。金將軍はたちまち桂月香を殺し、腹の中の子供を引ずり

出した。残月の光りに照らされた子供はまだ模^も糊^ことした血^け塊^っだ
つた。が、その血塊は身震^{みふる}いをすると、突然人間のよう^にに大声を
挙げた。

「おのれ、もう三月待^{みつ}てば、父の讐^{かたき}をとつてやるものを！」

声は水牛の吼^ほえるように薄暗い野原中に響き渡つた。同時にま
た一痕の残月も見る見る丘のかげに沈んでしまつた。……

これは朝鮮に伝えられる小^こ西^{にし}行^{ゆき}長^{なが}の最期である。行長は勿論
征韓の役^{えき}の陣中には命を落さなかつた。しかし歴史を粉^{ふん}飾^{しよく}す
るのは必ずしも朝鮮ばかりではない。日本もまた小^{しょう}児^にに教える
歴史は、——あるいはまた小児と大差のない日本男児に教える歴
史はこう云う伝説に充ち満ちている。たとえば日本の歴史教科書

(大正十三年一月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1999年1月8日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金将軍

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>